

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370138

研究課題名(和文) 清水多嘉示が遺した資料の研究 - 近現代美術史の周辺と専門的美術教育について

研究課題名(英文) A study of Shimizu Takashi's surviving materials: On several peripheral areas of modern art and professional art education schools in japan

研究代表者

黒川 弘毅 (Kurokawa, Hirotake)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：50366879

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、清水多嘉示が遺した資料を整理・分類して、その画像にインデックスを付けて目録化したデータベースを作成した。清水の作品を含め、大正～昭和にわたる文書・写真・印刷物のアーカイブとして今後の公開を期す。

本研究は、東アジアの近代美術形成への関与を含めて、近代から現在に至る日本の私学における専門的美術教育の意義を闡明し、その実像を研究するための重要な情報源を構築した。これによりこれまで見過ごされてきた美術の周辺領域における新しい研究課題の発見に繋がり、本研究の成果は美術以外の他領域からの学術的アプローチにも大きく貢献するだろう。

研究成果の概要(英文)：Shimizu Takashi's surviving materials have been organized and classified in this study. These materials have been individually photographed and a database has been created of categorized and indexed images. Including works by Shimizu himself, an archive of documents, photos and printed materials of the Taisho and Showa periods will be published in the future.

This study is intended to elucidate the significance of professional art education at private schools in Japan from the modern period until recently, including the relation with the formation of modern East-Asian Art. Important sources for understanding the actual state of this have been reconstructed. In several peripheral areas of art which have been largely overlooked, new issues will be discovered based on the results of this study. This can greatly contribute to academic approaches from fields other than Art.

研究分野：彫刻

キーワード：近代日本彫刻 清水多嘉示 専門的美術教育 ブールデル受容 戦争と美術 帝国美術学校 留学生

1. 研究開始当初の背景

清水多嘉示(1897・明治30年～1981・昭和56年)は、画家を志して渡仏しブールデルと出会って彫刻を学んだ。1928年(昭和3年)に帰国後、1929年の帝国美術学校設立に参画した。戦前は院展、その後国画会で彫刻と絵画を発表し、“新興美術”の体現者として若い世代に大きな影響力を持った。戦後は美術界の重鎮として日展で彫刻を発表、晩年は日本芸術院会員となり紺綬褒章など数々の叙勲を受けた。昭和期を代表する彫刻家の一人である清水は、生涯を通し作品制作と同等の熱意を持って美術教育に取り組むとともに社会的にも広く活動した。帝国美術学校から武蔵野美術大学に至る清水の勤務年数43年は、学校の歴史のほぼ2分の1にあたる。

遺族は清水多嘉示の没後、作品の他、文書や写真、印刷物など、その生涯にわたる資料(以下、清水資料と呼ぶ)をたいせつに保管してきた。2006年、これらを近代美術研究に広く役立てることを希望する遺族から武蔵野美術大学に資料を一括寄贈する意志が表明され、本研究が開始された。資料を整理・分類し、これを多くの研究者が検索できるように目録を作成する作業が本研究の基本となる。

清水資料については2007年以来、武蔵野美術大学共同研究「清水多嘉示の美術教育について」～において継続的な研究が行われてきた。それらの研究成果は同大学美術館・図書館において2011年に第1期・第2期に分けて開催された「清水多嘉示資料展」、主要著作の再録と文献リストを掲載した研究報告書『清水多嘉示 資料・論集』(2009年9月)、作品カタログ・レゾネと作品資料目録を掲載した研究報告書『同』(2015年7月)で発表されてきた。本研究では、これまでの共同研究のメンバーのほかに田中修二(連携研究者)、迫内祐司(研究協力者、日光小杉方菴記念美術館 学芸員)らを加え、「外部」の研究者の参加により、研究の普遍性を強化し、清水資料をより多角的に意義づけることが意図された。

2. 研究の目的

資料は、清水の営為を多角的・重層的に示す。大正期の諏訪地方のリベラルな教育・文化環境、1920年代の美術家の西欧体験、帰国後の着地と30年代の記念碑的彫刻への志向、日中戦争以降の翼賛体制への関与と敗戦での処身、戦後の国際交流、昭和後期人体彫刻と

美術教育—大正から昭和までを経時的に残している清水資料は、この時代における美術史のキーワードをすべて備えている。それは清水個人に限らず、広く日本近代美術史に関する一次資料の宝庫である。

本研究でのミッションは、作品以外の資料を整理して画像データを作成し、これを目録化してデータベースを作成することである。それは、作品制作に限られない広範な社会活動への関与を示す清水資料の解明を通して、近現代日本美術史にとどまらず、その周辺領域、さらにはアジアの近現代美術史における新しい研究課題の発見に資することを目的とする。武蔵野美術大学のアーカイブとしての公開を期して、既に完成した作品資料と統合し、幅広い領域の研究者に向けたデータベースを構築することを目指した。これにより、美術の境界領域の外からも、多くの研究者による様々な観点により資料のさらなる解明が行われ、新たな知見が多く生み出されるだろう。

これまでの科研費による近代の専門的美術教育についての研究は官立の工部美術学校に偏り、そのほとんどの研究機関は東京芸術大学であった(註1)。また、東アジア留学生研究に関しては吉田千鶴子の研究(註2)があるが同様の状況である。本研究では、留学生も視野に入れた私学における専門的美術教育に関する本格的な研究のための基礎資料の形成を目指した。

註1:「日本の近代・洋風彫刻の受容についての考察—工部美術学校彫刻学科卒業生の足跡から」研究課題番号22820023)や東京美術学校(「東京音楽学校、東京美術学校の受託作に見る近代日本の芸術教育」同22320034、「大村西崖の研究」同21520118、「東京美術学校西洋画科の絵画技法材料の解明・自画像群の自然科学的調査を通して」同20320031、「東京美術学校西洋画科卒業制作自画像の技法・材料に関する総合的研究」同16320017など

註2:『近代東アジア留学生の研究・東京美術学校留学生史料』、ゆまに書房、2009年2月

3. 研究の方法

資料は清水の全生涯にわたるものであり、これを四つの時期に区分する。

①諏訪期:幼年期から旧制諏訪中学在学、ほぼ独学で絵画を学んだ教員時代。1923年(大正12年)3月の渡仏前まで。

②渡仏期:パリに留学して帰国する1928年

(昭和3年)5月まで

)帰国 - 終戦期(昭和前期): 帝国美術学校の設立参画から、国画会出品を経て、敗戦へ至る1945年(昭和20年)まで

)戦後期(昭和後期): 武蔵野美術学校 - 大学で教鞭をとるとともに、日展彫刻部の要職を歴任して芸術院会員となり、没する1981年(昭和56年)まで

資料を以下の種類に分類する。

作品資料: 石膏を中心とする彫刻類、油彩・水彩・素描などの平面類、清水以外の作品を含む。

文書資料: 日記・手帳、草稿・メモ類などの自筆文書類、清水の親族を含む清水宛書簡と清水による書簡の下書きや控え、公的な通知書類・辞令・賞状、腕章などの付属品、証書類とその下書き・控え、名刺、旅券・身分証、入館証・切符、自筆履歴書など。

写真資料: 美術館・出版社から購入した作品写真、清水自身による写真・ネガ・ガラス乾板、清水以外による作品・展覧会・風景・人物、親族を含む伝記的記録写真、制作資料写真など。

印刷物: 清水が執筆したものを含む単行図書・定期刊物などの蔵図書、風景・建物・作品・展覧会などの絵葉書類、ポスター、パンフレット、印刷物切り抜きなど。

資料を上述の4つの時期に区分しそれぞれ資料種別に分類し、これをさらに時代ごとに異なるテーマで細分して暫定的な目録を作成し、これに沿って画像のデータベースを作成した。ただし清水以外の著作権があるもの、私信などの書簡類で個人情報を含むものは、公開のための画像のデータベース化を保留した。印刷物のポストカードと写真は、画像を目録と対照させ、画像を検索・参照できるようにインデックスを付けて目録化しデータベースを作成した。印刷物は、多くのものの裏側にメモ、草稿、スケッチが描かれており、一つの資料に目録と画像が重複する。草稿類などの文書も同様に裏に別な草稿を書き込んだものが多くあり、これらは本研究期間内に目録化を完了していない。

連携研究者や研究協力者が画像を保存したサーバーに外部からアクセスしてインデックス付け作業を行うシステムを本研究の初年度に構築し、これにより作業を効率化して目録の完成度を高め、複数の研究者が協働して資料を読解し説明することを目論んだ。しかし

データの保全、変更・記入の管理に関して多くの問題点が判明し、これは実行されなかった。それはまた、作業の進行とともに当初の想定を越える資料数を画像データ化する必要性が認識され、実際の目録数量の増大とともにインデックス付け以前の作業量が激増したためでもある。資料の解明とインデックス付けの作業は不可分な作業である。本研究では、当初想定したような研究者による共同作業を有効に行えず、資料の解明より画像の作成・整理を優先せざるを得なかった。それでも写真資料全て、文書資料の中の書簡、印刷物の内のポストカードの目録化を終え、データベースの概形をほぼ完成したとすることができる。

4. 研究成果

すでに刊行された共同研究報告書『清水多嘉示 資料・論集』では、作品のカタログ・レゾネと作品資料目録を掲載し、データベースを完成している。このデータベースは、本研究の中で修正が行われた(目録数=画像数は彫刻:450、油彩:660、水彩・スケッチ:14300)。

本研究では、作品資料以外の文章・写真・印刷物の全資料を対象として整理と目録化を行った。当初から資料の悉皆的な画像のデータ化を方針としていたが、一つの資料に裏表両面の画像を必要とするものが多く、作業の進展とともに当初予想していた画像数を遙かに超える24000(数え方にもよるが2つの種別にわたり重複するものや公開しない画像を算入すると26000)の画像数に達した。当初、目録数を5000程度に整理することを想定していたが、実際にはこの数倍以上に達し、本研究期間内に10000を越える目録数でデータベースの概形を作成した。文書資料(画像数:3500)は書簡類の目録化(目録数:3200、絵葉書や公的な書類の画像は撮影して印刷物に統合)を概ね完了したが、原稿・草稿類(画像数:3500)は目録化が完了しなかった。写真は技術的難点によりネガ・ガラス乾板の画像の作成を見送ったが、これらを除く全資料(目録数:6500、画像数:9300)を概ね完了し、印刷物の9割を占める展覧会や滞仏期に購入した絵葉書類の資料(目録数:約1000、画像数:14000)と文献類(目録数:950、画像を対照せず)は目録化を終えた。文書資料と印刷物は多くが目録化を終了しておらず、データベースとしてはまだ不完全であるが、

これらも画像の整理・分類は完了しており、概ね当初の目的を達成したとすることができる。

本研究で対象となった画像数24000(26000)に、これと統合した作品資料の画像数(=目録数)を加えると、合計数が39000を越える画像でデータベースが作られた。現在このうちから22000の目録数で公開に向けたアーカイブに移行可能である。当初、本研究の成果として資料の目録篇を刊行することを予定したが、データ量の増大により紙媒体の冊子による作成が非現実的なものとなってこれを断念し、今後作成するデジタルアーカイブでの公開を期す。

本研究が達成した成果の意義を以下に述べる。

清水は1916年(大正5年)に代用教員に服して以来、帝国美術学校にはじまる武蔵野美術大学以外にも、日本大学専門学部芸術科などで講師を務め、これらに関する資料は美術教育に関する貴重な情報源となる。現在、専門的美術教育研究は東京美術学校を中心としたものに限定されているが、本資料は日本近現代美術の形成に対して果たした私学の功績を闡明し、私学における専門的美術教育史を研究するための重要な情報源となる。それは、東京美術学校とは異なる多様な留学生の実像と、東アジアの近代美術の形成における日本の専門的美術教育の関与を知る上で役立つ。

1943年戦時体制下で清水は「生産美術協会」発起人・理事として美術政策立案を試みるなど、清水も他のパリ留学組の美術家同様、軍主導の「戦争美術」に積極的に荷担した。戦後、清水は1954年ベニス、翌年パリのユネスコ本部で開催された「国際造形芸術連盟」の会議に日本代表、執行委員として出席した。美術を取り巻く社会活動全般にわたる資料は、これまで見過ごされてきた美術の周辺領域、さらにはアジアの近現代美術史における新しい研究課題の発見に繋がる。

清水は趣味で自ら写真を撮り、これらが豊富に残されている。また大正期公募展のカラー絵葉書、滞欧期に収集した美術作品・記念碑・建造物の写真、観光絵葉書のほか、画材のカタログ、様々な商品広告や音楽会等のパンフレットなどがあり、これらの雑多な資料は、美術とは直接関係ない他領域、多方面からの学術的アプローチに多大な成果をもたらすだろう。

2013年から、武蔵野美術大学とロンドン大学スレード校、ヘンリー・ムーア・インスティテュートとの3者による国際共同研究“Modern Japanese Sculpture Network”が開始された。「日本における彫刻の近代化は単なる西欧化ではなく、西欧と日本の近代彫刻の展開にはいかなる関係性があるのか?」というテーマに沿ってイギリスのリーズにあるヘンリー・ムーア・インスティテュートで開催される「近代日本彫刻展」の企画が立てられ、その準備のためのワークショップが東京とロンドンで開催された。黒川は2014年4月にロンドン大学で催された研究会議(Workshop on Modern Japanese Sculpture Part II)で“The notion of truth in sculpture”と題したレクチャーを行って清水資料を紹介し、本研究の意義を述べた。2015年、ヘンリー・ムーア・インスティテュートで展覧会が開催され、武蔵野美術大学にその「帰国展」が巡回した。リーズと東京の会場では展示に合わせて国際学会会議と国際シンポジウムがそれぞれ開催され、本研究メンバー全員と研究協力者の井上がこれに参加した。これらの国際交流を通して近代日本彫刻に対する西欧の視点を意識し、海外の研究者も視野に入れた資料のアーカイブを構築することの必要性が認識された。清水資料にある1950年代の「国際造形芸術連盟」に関するものには美術を通じた国際交流への清水の深い志を見て取れる。本研究は、清水の活動の事実を解明するだけでなく、実践としてその志を現代に引き継ぐことでもある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

黒川 弘毅、媒体と素材：リアリズムについての考え方の差異 - On Medium and Materials: Differing Ideas of Realism、査読無し、ESSAY ON SCULPTURE、72、HENRY MOOR INSTITUTE、2015、日 p.20-27、英 p.60-63

田中 修二、日本彫刻への視点:1910年代~1930年代における彫刻家の社会的背景 - Perspectives on Japanese Sculpture: Infrastructure for Sculptors during the1910s to 1930s、査読無し、ESSAY ON SCULPTURE、72、HENRY MOOR INSTITUTE、2015、日 p.28-34、p.英 64-67

[学会発表](計12件)

伊藤 誠、On the current state of the Sculpture Department of Musashino Art University and my works、Modern Japanese Sculpture Network、2014年4月4日、ロンドン大学スレード校

黒川 弘毅、The notion of truth in sculpture、Modern Japanese Sculpture Network、2014年4月4日、ロンドン大学スレード校

田中 修二、What is Japanese Modern Sculpture?、Modern Japanese Sculpture Network、2014年4月4日、ロンドン大学スレード校

黒川 弘毅、清水多嘉示の石膏原型について、清水多嘉示 石膏像の魅力展、2014年10月12日、原村立八ヶ岳美術館

黒川 弘毅、On Medium and Materials : Differing Ideas of Realism、2015年1月31日、ヘンリー・ムーア・インスティテュート

田中 修二、Perspectives on Japanese Sculpture: Infrastructure for Sculptors during the 1910s to 1930s、2015年1月31日、ヘンリー・ムーア・インスティテュート

田中 修二、アジア太平洋戦争における日本彫刻の“表現”：制作・溶解・空想、国際シンポジウム「ヴィジュアルの中のアジア太平洋戦争」、2015年6月18日、高麗大学100周年記念会館

黒川 弘毅、「近代日本彫刻展」帰国展の展示について、国際シンポジウム The Study of Modern Japanese Sculpture、2015年7月17日、武蔵野美術大学美術館

田中 修二、「彫刻」と「日本画」の間、国際シンポジウム The Study of Modern Japanese Sculpture、2015年7月18日、武蔵野美術大学美術館

井上 由理、武井直也の彫刻の軌跡、屋外彫刻調査保存研究会、2015年7月19日、武蔵野美術大学

田中 修二、近代日本のロダン受容の多様さ、静岡県立美術館ロダン館開館20周年記念国際シンポジウム、2015年10月31日、静岡県立美術館

田中 修二、近代日本におけるドローイングの役割、Modern Japanese Sculpture Network、2016年3月9日、ロンドン大学スレード校、

[図書] (計 12 件)

田中 修二、迫内 祐司、篠崎 未来 他、国

書刊行会、近代日本彫刻集成第三巻、2013、760

田中 修二 他、クオリアート、日本藝術の創跡 18 20 世紀が見た夢新しき表現の開花、2013、349

黒川 弘毅、田中 修二 他、武蔵野美術大学彫刻学科研究室、Modern Japanese Sculpture Net-work PartI、2014、41

黒川 弘毅、田中 修二 他、武蔵野美術大学彫刻学科研究室、Workshop on Modern Japanese Sculpture 英語版、2014、53

田中 修二 他、ソウル国立中央博物館、国立中央博物館所蔵日本近代美術彫刻・工芸篇 日本近代美術学術調査報、2014、241

黒川 弘毅、田中 修二 他、武蔵野美術大学彫刻学科研究室、Workshop on Modern Japanese Sculpture 日英両語版、2015、92

黒川 弘毅、井上 由理 他、武蔵野美術大学彫刻学科研究室、清水多嘉示 資料 / 論集 II、393

田中 修二 他、静岡県立美術館、オーギュスト・ロダン (1840-1917) - 複合的視点で捉える -、2015、107

井上 由理、市立岡谷美術考古館、武井直也の彫刻の軌跡、2015、32

黒川 弘毅、田中 修二、朴 亨國 他、武蔵野美術大学彫刻学科研究室、The Study of Modern Japanese Sculpture 日本語版、2016、139

朴 亨國 他、韓国国立現代美術館・トルベゲ、巨匠李快大 会報の大叙事詩 特別展図録、2015、532

迫内 祐司 他、国書刊行会、彫刻家 上田直次・薫 作品と歩み、2016、250

6 . 研究組織

(1)研究代表者

黒川 弘毅(KUROKAWA, Hirotake) 武蔵野美術大学・造形学部彫刻学科・教授 研究者番号：50366879

(2)研究連携者

伊藤 誠(ITŌ, Makoto) 武蔵野美術大学・造形学部彫刻学科・教授 研究者番号：20318629

朴 亨國(PARK, Hyoungook) 武蔵野美術大学・造形学部造形文化・美学美術史研究室・教授 研究者番号：00350249

田中 修二(TANAKA, Shūji) 大分大学・教育学部・教授 研究者番号：0035049

(3)研究協力者

井上 由理(INOUE, Yuri) 原村立八ヶ岳美術館・特別研究員

篠崎 未来(SHINOZAKI, Miki) 小平市立平櫛田中彫刻美術館・学芸員

青山 敏子(AOYAMA, Toshiko) 清水多嘉示遺族